

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 文学部・教授・榎本庸男
研究課題：カント哲学における道徳と美
研究期間：2015年9月25日～2016年3月31日

研究成果概要（日本語（全角）の場合は2,000字程度）

美と善は、同列に扱われてきた（「よいもの」という括りで善のヒエラルキーに組み込まれる）こともあれば、質的に異なったものとして、それぞれに別の領域が与えられることもある。カントは明らかに後者に属する。趣味判断が関心から自由であること、概念に包摂されることなく普遍性をもつこと、目的を措定できないような合目的性をもつこと、概念に包摂されることなく必然性をもつこと、この四つの徴表のそれぞれにおいて、美しいものは善きものと区別される。

このように美と善とを区別することは、美の特性を描き出す上で大きな意味をもつ。人間の生を様々に縛る、多くのしがらみから離れて、来し方行く末を慮る人間的配慮を顧みることなく、高度に自由な境位にあつてこそ、美は立ち現れるからである。美を感受するときには、人は道徳的法則からすら自由でなくてはならないのである。

しかしながらわれわれの日常において、美と善が接近することもしばしばある。つまり善き行為を美しいといい、悪しき行為を醜い、見苦しいというような場合である。このように道徳的判定に美的な述語を用いることを、カントの枠内で、どのように捉えるべきか。

以上のようなことがここ数年の問題意識である。今年度はさらに、道徳と美という関係性の一部をなす「聖なるもの」と美の関係についても考察を進めた。様々な宗教において、美と信仰の対象とは密接な関係にある。しかしこの関係は必然的なのか、それとも偶々なのか。美しいものにこそ聖性が宿り、それが信仰の対象となるのか。それとも信仰されるからこそ、聖なるものという属性を獲得するのか。信仰されることをやめた場合（博物館に移設される、廃寺になる等）、その聖性は消え失せるのか。等々、聖性と美の関係も、考察を要する問題を多くはらむ。

特別研究期間の後半を利用して、イタリア各地の主として宗教的建造物をめぐり、そこで信仰の対象がどのように扱われているかを見た。もとより「聖なるもの」といい、「神々しさ」といい、きわめて主観的な感情であり、それは観察によって測られうるものではない。しかし芸術作品が、実際に信仰の対象となっている様をみて、またもはや信仰の対象としてではなく、単なる美の対象となっている様をみて、大いに感じるころはあった。この感じ取ったことを何とか概念化し（矛盾した言い方ではあるが）、今後の研究に生かしたいと思う。

現在の時点で、明らかになっていることを次に示す。

1. カントがあげる趣味判断の四契機は並列しているのではない。第一の契機である「関心のなさ」が他の三つを基礎づけている。
2. 「関心のなさ」は、非常に根源的に人間のあり方を規定する。つまりそれは、社会や歴

史といった実践的な空間を止揚し、極度に私的でかつ公的な（利害得失に関わらないという点で公的な、しかし他者を寄せ付けないという点で私的な）態度を要求する。そのような境位にあつてこそ、美は立ち現れるのである。

3. したがって趣味判断の必然性を保証する共通感覚を政治の場での討議や合意を基礎づけるものと捉えるのは誤りである。
4. また趣味判断は、道徳に還元されてはならない。したがって『判断力批判』、「美しいものの弁証論」で述べられることは誤りではないか。それはカントの基本的な姿勢と齟齬がありすぎるように思える。

以上のような研究と並んで、今年度は歴史についての考察を「『歴史から学ぶ』ということ」と題する論文にまとめた。行為の道徳的判定を美的に表象するということが妥当な認識であるならば、まさに歴史を対象として他者の行為を判定することはその典型である。本論文では、ヘーゲルの歴史哲学を中心にして、「歴史から学ぶ」ことが、すべての人に開かれているというほど簡単ではないこと、社会体制が公共的な理想を実現していくにしたがって、また個々人が特殊性の圭角を矯めていくに依じて、可能となることを示した。

今後もこの方向（美と善と宗教の関係）に研究を進めたいと思っている。さしあたっては、天才の技と聖性との関係である。中世からルネサンスにかけて輩出した、異様な才能をもった職人と天才を分かつものはないか。天才を凡人が理解するとはどのようなことか。等々の問題に取り組みたい。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。